もくじ

はじめに ―― 1

宝物「聖徳太子御影」 ―― 2

聖徳太子ってどんな人？ 季刊せいてん編集室 ―― 3

聖徳太子への思い ― 初期真宗の太子像から ― 季刊せいてん編集室 ―― 4

親鸞聖人が敬われた聖徳太子「和国の教主」像
龍谷大学名誉教授 川添泰信 ―― 6

対談「親鸞聖人が尊敬された聖徳太子」釈 徹宗×瀬谷貴之 ―― 18

聖徳太子研究の最新動向 駒澤大学仏教学部教授 石井公成 ―― 42

聖徳太子絵伝（上宮寺蔵） ―― 44

参考文献 ―― 48

表紙絵：中田 文花

※本文中、『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』（本願寺出版社）の引用は『註釈版聖典』、『浄土真宗聖典全書』（本願寺出版社）の引用は『聖典全書』と略記しています。

はじめに
（刊行にあたって）

聖徳太子は、仏法僧の三宝を篤く敬い、『憲法十七条』を制定されました。親鸞聖人は、太子を観音菩薩の化身・和国の教主と尊崇されました。

本書は、本山・本願寺で営まれる聖徳太子1400回忌法要を機縁に、宗祖・親鸞聖人がどのように聖徳太子を敬われたかを知り、門信徒・僧侶・寺族の皆さま一人ひとりにその思いを味わっていただくことを願い、刊行いたしました。

仏教が日本に伝来した時代に思いを馳せ、聖徳太子のご生涯とご事績にあらためて触れることで、私たちに仏教が伝わってきた遙かなる道のりを感じていただくことができれば、この上ないよろこびです。

聖徳太子が説かれた仏法の豊かな世界は、混迷の時代を生きる私たちにとって、大きな灯火となることでしょう。

制作にあたり、龍谷大学の川添泰信名誉教授に玉稿を賜ったほか、相愛大学の釈徹宗副学長、神奈川県立金沢文庫の瀬谷貴之主任学芸員には、ご多用の中３回にわたる対談を行っていただきました。また、浄土真宗本願寺派総合研究所内「季刊せいてん」編集室の八橋大輔研究員、野村淳爾研究員、林 龍樹研究助手には、該誌掲載内容の転載にあたり、多大なるご協力をいただきました。ここに記し、感謝を申しあげます。

宝物「聖徳太子御影」

絹本著色 聖徳太子像

国指定重要文化財。本願寺蔵。
元禄８年（1695）、奈良・法隆寺から
本願寺第14代・寂如上人に贈られた。

聖徳太子って どんな人？

聖徳太子については、日本史の授業で学んだだけという方も多いでしょう。そこでまずは、復習の意味も込めて、聖徳太子についての簡単なご紹介からです。

聖徳太子は、一般的に古墳時代と呼ばれる時代の後期、574年に誕生しました。親鸞聖人が敬われた七高僧の中、中国の道綽禅師や善導大師と同時期の方です。父は用明天皇、母は蘇我氏の流れをくむ、欽明天皇の第３子穴穂部皇女といわれています。

587年、蘇我馬子が戦の末に物部守屋を滅ぼし、さらに592年に崇峻天皇を暗殺して権力を掌握する中、592年に推古天皇が即位します。聖徳太子は叔母にあたる推古天皇の下で、蘇我馬子らと協力しながら国づくりを進めていきます。

604年、太子は「憲法十七条」を定めます。これは現代の日本国憲法などとは異なり、朝廷に仕える役人に対して道徳規範を示したものです。現代ならば、公務員に対して定めた、職務にあたる上での十七条の心構えといえます。その第一条は有名なこの言葉から始まります。

和らかなるをもつて貴しとなし、忤ふる（背き逆らう）ことなきを宗となす。

（『註釈版聖典』1433頁）

太子の願いは、何よりも争いのない平和な世の中でした。「憲法十七条」には、「忿を絶ち瞋を棄てて、人の違ふを怒らざれ」（『同』1436頁）や「嫉み妬むことあることなかれ」（『同』1437頁）など、自身の怒りや欲望から他者を批判する姿勢を戒める記述が数多く見られます。当時の世の中は争いが絶えなかったのでしょう。

第二条には、次のようにあります。

篤く三宝を敬ふ。三宝は仏・法・僧なり。（中略）それ三宝に帰りまつらずは、なにをもつてか枉れるを直さん。（『同』1433頁）

聖徳太子は、世が乱れる原因が人々の心に潜む自己中心的な考えにあるとし、仏法によってそれを鎮め、安定した国家の形成を目指されました。太子は仏法こそが、世の中に安寧をもたらす唯一の法であると言い切られているのです。

聖徳太子像（真宗曼荼羅、妙源寺蔵）

聖徳太子への思い
―初期真宗の太子像から―

親鸞聖人がいかに聖徳太子を敬っておられたかは、制作された和讃の数からうかがい知ることができます。親鸞聖人の和讃は、「三帖和讃」（『浄土和讃』、『高僧和讃』、『正像末和讃』）の他、聖徳太子に関する和讃が約200首あります。200首という数は、全和讃の３分の１以上を占め、聖人が太子に関する和讃をいかに多く作られたかがわかります。

また聖人は、和讃だけでなく、図像を用いて太子を讃嘆しておられたと考えられます。それは、本尊の名号や先徳の影像等に付される讃銘について註釈を施した『尊号真像銘文』（広本）に太子に関する銘文が解説されているからです（『註釈版聖典』659頁）。解説があるということは、親鸞聖人当時でも太子影像が描かれていたことを示唆しています。

たとえば、親鸞聖人在世中に聖徳太子の姿を描いたものであり、かつ親鸞聖人が制作に関わっているとされているものに、妙源寺（愛知県岡崎市）蔵の「真宗曼荼羅」（以下、妙源寺本）があります。妙源寺で「真宗曼荼羅」と呼ばれているものは、一般に「光明本尊」と言われています。

光明本尊とは、中心に名号（九字や八字名号など）が配され、その名号本尊から四方にむかって光明が描かれ、その光明の中に浄土教の祖師先徳等の像を描き師資相承を示した絵図のことをいいます。

この妙源寺本は、現在多く見られる光明本尊が一幅であるのに対して、三幅一具で成っており、一般的な光明本尊の先駆的なものとして位置づけられています。後世において定型化する一幅本の原型を持つものこそ妙源寺本なのです。

その構図は、中央の幅には九字名号、向かって左側の幅には勢至菩薩とインド・中国の念仏相承の祖師、向かって右側の幅には日本の祖師たちが描かれています。日本の幅（右幅）には、下部から日本の念仏相承者として聖徳太子および四隨臣（小野妹子、蘇我馬子、学哿、恵慈）に始まって、源信和尚、源空聖人、信空上人、聖覚法印、親鸞聖人が配されています。その中、太子の像容は、袈裟をつけ両手で柄香炉をもつ姿ですが、剃髪せず、髪を左右に長く垂らしている、いわゆる「垂髪」の様相で描かれています。実は、初期真宗における太子の通規的な像容は、この「垂髪太子」であったと考えられています。なお、この垂髪の姿は、現在一般的に余間に奉懸される、「角髪」の頭髪とは違っており、初期真宗の太子像を考える上で、留意する必要があるところでしょう。

「真宗曼荼羅」（妙源寺蔵）。向かって右側の下部に、垂髪の聖徳太子が描かれている。

また、この構図では、下から上へ時代が進むことを表しており、日本における念仏の相承が聖徳太子から連綿と後世に受け継がれていくことを示しているといわれています。親鸞聖人が聖徳太子を「和国の教主」（『註釈版聖典』616頁）と仰がれ、日本に仏教を広めた方として尊敬されていた考えが反映されているといえるでしょう。

さらに、このことは図像だけでなく讃銘からもうかがえます。妙源寺本には、図像だけでなく、各幅の天地と右幅の中間部分に親鸞聖人の高弟である真仏上人の筆による讃銘が記されており、右幅の中間部分には「太子御廟記文」が書かれています。この讃銘には、聖徳太子について、

> 吾為利生出彼衡山入此日域降伏守屋之邪見終顕佛法之威徳
> （われ利生のために彼の衡山を出でて(※)、この日域に入りて守屋の邪見を降伏し、ついに仏法の威徳を顕す）　（原文『聖典全書（二）宗祖篇上』905頁）

と示されており、聖人は聖徳太子を日本における仏教の興隆者と考えられていたことがわかります。

※聖徳太子には、天台宗の大成者智顗の師である慧思の生まれ変わりであるという伝承がある。衡山とは、慧思が晩年住した湖南省衡山（南岳）のこと。

親鸞聖人が敬われた
聖徳太子「和国の教主」像

川添泰信
Taishin Kawasoe
龍谷大学名誉教授、宮崎県宮崎市・西導寺衆徒。著書『愚禿のこころ』（永田文昌堂）、『うちのお寺がよくわかる！図解 浄土真宗』（洋泉社）他。

はじめに

聖徳太子は飛鳥時代の622年２月22日に薨去されたとされ、令和３年（2021）は没後1400年目にあたりますので、本願寺（西本願寺）では1400回忌がおつとめされます。

この機会に浄土真宗の宗祖・親鸞聖人が敬われた聖徳太子とはいかなる像なのか「親鸞聖人の聖徳太子像」をうかがっていきたいと思います。

一　聖徳太子の御影とその意味

まずはじめに、私たちが合掌礼拝する、浄土真宗本願寺派の寺院に安置される聖徳太子の御影はどのようなお姿であり、またどのような意味があるのか、についてみていきたいと思います。

聖徳太子の御影は、本山・本願寺では、阿弥陀堂（本堂）の左余間（向かって右）に奉懸され、一般寺院の本堂においても余間に奉懸します（『法式規範』）。御影に描かれる聖徳太子のお姿は、髪をみづら（頭の額の中央から左右に分けて、耳のところで一結びしてから、その残りを８字形に結んだもの）に結い袈裟を着用されて、柄香炉（持ち運びができるように柄をつけた香炉）を持って立たれるお姿です。

この姿は、10世紀頃に著された太子の伝記『聖徳太子伝暦』に依って太子16歳の時、三宝を供養して父・用明天皇の病気平癒を祈願した姿で、一般には「聖徳太子孝養像」といわれる絵相です。しかしながら、浄土真宗の御影については、賛銘に注視する必要があります。聖徳太子の上部には、「吾爲利生出彼衡山入此日域降伏守屋之邪見終顯佛法之威德」（われ利生のために彼の衡山を出でて、この日域に入りて守屋の邪見を降伏し、ついに仏法の威徳を顕す）（原文『聖典全書（二）宗祖篇上』905頁）という『上宮太子御記』の「太子御廟記文」が書かれています。

この賛銘により、天台宗の大成者・智者大師智顗の師である慧思が、人々を救済するために（湖南省の）衡山から生まれ変わって日本の聖徳太子となり、物部守屋を降伏して〝仏法を興隆させたお姿〟という位置づけに意味を転化しているのです。すなわち、浄土真宗において聖徳太子の御影は「仏法興隆像」という呼称がふさわしいと思われます。

また、賛銘の起源については、古くは妙源寺が所蔵する「真宗曼荼羅」と称されるなかに垂髪の聖徳太子が描かれ、そこに書かれているものが最も古いものです。しかし、現在の形になったのは明応９年（1500）に奈良県吉野町の本善寺に本願寺第９代・実如上人が授与されて以降と考えられます。というのも、聖徳太子を余間に奉懸することになるのは、もともとは小さな道場でお念仏していたのですが、次第にお念仏する人が増えてきたために大きな本堂を建立し、発展していったためではないか、と考えられています。

本願寺を現在の大教団に発展させた本願寺第８代・蓮如上人（1415～1499）の十男・実悟上人（1492～1584）が記した『山科御坊事並其時代事』には、文明13年（1481）に再建した本願寺、阿弥陀堂のご本尊の彫刻者や荘厳（お飾り）を説明する中に、「左方北太子絵像 讃如常蓮如御筆」（〈ご本尊の〉左の方、北側には聖徳太子の絵像〈御影〉賛銘はいつも通り蓮如上人がお書きになられた）と記されています。さらに同書に、

> 蓮如上人の御時、實如上人へ常に御物語候とて、實如上人常に御物語を度々承候つるは、太子の御命日に太子講私記あそばされ度候由、御物語候つると被仰由御物語候き。　（『聖典全書（五）相伝篇下』945頁）

と述べられるように、蓮如上人は22日の太子のご命日に「太子講私記」をおつとめ